

「共存・共生の精神」の生成と構造

—教育と福祉の統合の基本哲学と大学への「火種」—

Genesis and Structure of “the Spirit of Coexistence and Symbiosis”: Hybridization of Education and Social Welfare as a New Fundamental Philosophy

大藪 敏 宏
OYABU Toshihiro

「共存・共生の精神」は、通常の決まり文句的な「共存・共栄」の精神と、どう異なるのか。それはどのような普遍的個性をもちうるのか。どのような風土と歴史に根づくのか。

大学創立に至る建学の精神とそれに基づく大学の基本理念は、大学のアイデンティティを支える哲学的礎石として重要な意味をもつ。「違ったものが違ったままで共存できる原理」や「人間・自然環境などが共生する社会の原理」を探求し、学ぶ場の創造が構想された大学創立の原点に遡ることは、その理念の内実の解明に寄与する。それは教育と福祉にわたる創造の学に、どのような示唆をもたらさうだろうか。「富山県における教育哲学」を担った南原繁の教養哲学を参照しつつ、学園の建学の精神と関連する文脈の中でその類稀な個性的普遍的な内実の解明に取り組む。

キーワード： 自校史、建学の精神、アカデミックプラン、教育と福祉の哲学

1. はじめに—南原繁の身体的「教養」と地域的特性—

南原繁が「知性・教養・個性」について「そもそも教養とは何か。人々によって異なる把握の仕方はあらんも、その核心は知性をもってする人間本質の展開または人間個性の開発にある」と記すとき¹、その教養は19世紀ドイツ教養市民層の教養のように「身体性」を欠くものではなかった。この点において西洋のファウスト的教養に欠くこの空隙(つまり身体性を欠いた教養の空隙)を克服するものとして、その「知性・教養・個性」は構想されていた。それは、その「知性・教養・個性」に関する講述の直後で、教養と知識ならびに道徳および宗教との関連について説いた後で、次のように続けていたからである。—「しからば、われわれが学問に教養に、精神の世界を尊重する結果、『身体』を貶下し、忽諾に附することにならぬか、という疑問が起こる。かつて知識や精神が抽象的=形式的に考えられた時代においては、われわれの身体性は余り問題ではなかった。それはいわば『自我(イヒ)』に対する『非我(ニヒトイヒ)』—ついに自我が自我たるために克服すべき素材たるに過ぎなかった。しかし、われわれの精神を歴史的具體性において捉えるときに、身体は人間の生にとって重要な意義を有するに

至るであろう」²。このような南原繁の教養教育思想は親子二代に渡る師弟関係にあったとも言える吉田実富山県知事をはじめとして富山の地に受け継がれてきた³。南原繁の身体的教養教育哲学は一方でゲーテ『ファウスト』を参照しつつ射水平野の自然(フュシス)の農地改良に具現化しつつ、他方で身体(フュシス)とともに土地に根ざす教養ある公民を育てる「日本に唯一の」(射水郡立)「農業公民学校」に具現化した⁴。

この吉田実知事の発意によって創立した富山女子短期大学を継承する富山国際学園の呉羽キャンパスの校舎は⁵、経線(子午線)と緯線を尊重するかのよう概ね東西南北に配置されている。その結果として多くの教室も、その中に並ぶ机と椅子も概ね南北か東西に向いている。

ところが、東黒牧キャンパスの校舎は、したがってその中の教室も机椅子も経線(子午線)と緯線から、したがって東西南北から大きくずれて配置されている。東黒牧キャンパスの校舎が南北に沿っていないのは何故か。しかし本稿の結論を先取りすれば、富山国際大学の基本理念「共存・共生の精神」も、実は射水の「知性・教養・個性」と同様に、その教養が地域の自然(フュシス)的特性に学びつつ、その人間的教養が身体(フュシス)性を「貶下」(南原繁)せずに重視し尊重することと関わっている。

「共存・共生の精神」が、地域的特殊的文化的伝統や地域的自然の個性や人間的身体的教養形成との関わりにおいて、また人類の普遍的課題との関わりにおいて、どのような普遍的・特殊的・個別的課題と理念の内実をもつのか、そしてそれが教育と福祉との関連においてどのような基本哲学を示唆するのか、本稿は歴史的資料を探索調査しつつ、その「富山の教育哲学・思想」の具体的内実に取り組む。そのことを通じて、「共存・共生の精神」と「知性・教養・個性」が共有する、個性的な自然的身体(フュシス)に根ざした教養思想という(ドイツ教養市民層の教養概念を超える)人類の普遍的課題に応じる「新しい価値の創造」の試みが解明される。地域の個性的な歴史と土地の「風」と「土」に根ざした特殊的「人」による普遍的な「新しい価値の創造の場」としての大学の基本理念は、このような普遍・特殊・個の連環構造の中で成立することが明らかとなる。

「知性・教養・個性」も「共存・共生の精神」も、地域の自然と歴史に関係なくただの思いつきで生まれたものでもなければ、また時代への迎合によって哲学・思想もなく生まれたものでもない。世界遺産の指定はなくとも500年以上の歴史をもつ合掌集落から「新しい価値の創造の場」を構想する「富山県教育哲学・思想」が生み出した教育哲学と人間哲学の内実を解明する。本稿は、その原理的内実(あるいは構造)とそれが形成された歴史的経緯(あるいは生成)を資料的裏付けに基づいて(実証的かつ哲学的に)明らかにする。さらに、その基本理念の生成と構造を明らかにすることによって、教育と福祉にわたる新しい学の基本哲学の基礎を措定する。

2. 富山国際大学の基本理念と「共存・共栄」との比較

富山国際大学『平成22年度 大学機関別認証評価 自己評価報告書・本編(財団法人 日本高等教育評価機構)』(平成22(2010)年6月)の冒頭「I.建学の精神・大学の基本理念、使命・目的、大学の個性・特色等」の「1. 学園の建学の精神」で「高い知性と広い教養、健全にして豊かな個性」を富山国際学園の建学の精神として確認したうえで、「2. 大学の基本理念、使命・目的、教育理念・目標」の冒頭において、次のように記している。—「富山国際大学の設立準備過程において、『地球規模で考え、地域に根ざして行動すべき時代にあって、世界のいかなる人々とも友好関係を結びうる人間を育てる』ことが必要であるとして、『世界の国々の違ったものが違ったままで共存できる原理』や『人間・自然環境などが共生する社会の原理』を探求し、学ぶ場の創造が構想された。そして、立山連峰を目前に望む富山市東南部の丘陵地に、世界の国々との共存や自然との共生にふさわしい学びの空間として『地球むら』(※)をイメージし、自然と建物が一体となった低層・分棟方式による建築様式のキャンパス(現『東黒牧キャンパス』)を構想した」⁶。

そこにある「地球むら」に注を附して、「『地球むら』とは、習俗言語が異なる世界の人々が、その違いをこえて出会える場であり、違うものが違ったままで共生できる場でもある『むら』をいう」と注記されている⁷。

その上で、「このようにして、富山国際大学の基本理念は、『共存・共生の精神と知性を磨く教育を基本に、時代の潮流に対応できる、健全にして個性豊かな人材を育成して、国際社会および地域社会の発展に寄与する』ことであり、富山国際学園の建学の精神や大学創立の経緯を踏まえた理念となっている」としている⁸。

「共存・共生」によく似た通俗概念に「共存・共栄」があるが、どう異なるのかを説明できなければならないはずである。そのためには、まず「共存・共生の精神」がどのような歴史に基づいて生み出されたのかを確認しなければならない。が、その前に本節では、ステレオ・タイプの人口に膾炙した「共存・共栄」の精神の検討を試みることによって、両者のコントラストを際立たせたい。

たとえば、近年は「ウィン・ウィンの関係」という概念が用いられる機会が増えている。2013年10月9日、中国の李克強首相は中国・ASEAN首脳会議の冒頭で「我々の協力を深める鍵は経済発展に焦点を合わせ、ウィンウィン関係を広げることだ」と強調した⁹。また、2015年9月に中国の習近平国家主席が訪米した際に人権問題で中国に改善を迫った米国のオバマ大統領に対して、習主席は「冷戦は終わった。ゼロサムの古い観念を捨て、協力とウィンウィン関係を築く信念を持つべきだ」と応じた¹⁰。このような「ウィンウィン関係」は「共存・共栄」の関係と同様のものと考えられ、だから「ウィンウィン」を「共存・共栄」と置き換えても問題は生じない。だから読売新聞の報道では、「石油天然ガス・金属鉱物資源機構(JOGMEC)の本村真澄・主席研究員は『日露はエネルギー分野で利害が一致している。ウィン・ウィン(共存共栄)の関係だ』と指摘する。だが、協力が調停に進んでいるとは言えない」と報じている¹¹。つまり「ゼロサムの古い観念を捨て」、「経済発展に焦点を合わせ」、基本的に2人もしくは約2か国で協力してパイを増やして、増えたパイを協力同胞間で山分けしようというのが「ウィンウィン関係」つまり「共存・共栄」の論理と言える。同胞ではない違った人間の人権や生存や共存はともかくとして、協力して増えた「営利」を協力した同質の仲間の間だけで分配して「共存・共栄」しようという意味で基本的に「営利」もしくは功利主義の論理とも言える。「営利」という一点で「同質」なもの同士の「共存・共栄」であり、そのためには小異を捨てて大同に就くという一点において「共存・共栄」の同質仲間になることができるという論理になる¹²。その場合は、同質になった仲間と排除された異質なものとの陣営との間の、つまり味方と敵との間の軋轢が増大することが予想される。中東をはじめとする世界各地でこのような軋轢が増大する世界情勢を振り返るとき、その背後に異質なものを排除するこのような共存共栄の発想が見え隠れしていないか、注視に値する。

他方、「共存・共生の精神」は「違ったものが違ったままで共存できる原理」の探求に関わる以上、異質なものを排除する論理の対極にあることは明らかであるが、それが「大学創立の経緯を踏まえた理念となっている」のであるから、大学創立史を現存資料によってより詳細に遡源することによって、その理念のより詳細な具体的な内実を明らかにすることができるはずである。同時に、それが富山国際学園の建学の精神とどのような理念的関係をもつのかも、同様の手続きによってより明らかにすることが可能になるかもしれない。

3. “質の時代”の新しい“むら”と本多文書

2014(平成26)年3月26日発行の『富山国際学園50年史』の第3章「大学の創立と学園の新生」には、「新大学設置の要請を受けた金岡幸二理事長は、昭和59年6月に『21世紀の大学づくり研究会』を発足させ、『富山国際大学アカデミックプラン』を作成。先の答申が出された昭和61年の暮れから、カリキュラムと教員人事に関する検討が進められた」というところから大学創立史を始めている。したがって、この21世紀の大学づく

り研究会によるアカデミックプランの作成過程の中に、大学の基本理念の源流を確かめることができる。

2014(平成26)年12月1日現在で東黒牧キャンパス1号館の元本多研究室の書架の上から4段目に存在する資料のうち富山国際大学の基本理念を理解する上で重要なものとして、「制作：21世紀の大学づくり研究会」による「1984.10.27」の日付が記された「21世紀の大学づくり—要約—」がある。この資料はどういうものかを示すのが、その下に置かれていた「富山国際大学建学までの道程」というファイルである¹³。

このファイル「道程」の冒頭「21世紀の大学づくり」関係経過概要書は、1981(昭和56)年3月の「国土庁学園計画地ライブラリに登録」から始まり、1983(昭和58)年11月に大山町が富山財務局へ少年学院跡地の利用構想に説明していることがわかる。ここまでは基本的に大学の土地の調達に関連した事項のみであり、大学の教育理念にかかわる事項は1984(昭和59)年6月「21世紀の大学づくり構想の研究に着手」からであり、同年10月「21世紀の大学づくり構想を要約 町が説明を受ける」とあり、11月に「21世紀の大学づくり構想を町議会に説明」という経過を辿っている。

したがって上述の「21世紀の大学づくり—要約—」というホチキス留めの資料は、この同年10月「21世紀の大学づくり構想を要約 町が説明を受ける」の際の「要約」資料と考えられる。ファイルの「21世紀の大学づくり研究会員名簿」には金岡幸二(インテック社長、富山女子短期大学理事長)、西川義正(富山女子短期大学学長)、青柳正美(インテック参与、元県生涯学習センター所長)¹⁴、足立原貫(富山県立技術短期大学教授)、坂下淳三(富山女子短期大学参与、元県職員研修所長)、政二俊子(元労働省富山婦人少年室長)、稲葉実(三四五建築研究所長)の7人の名前が記されている。これに対して「大山町議会学園都市特別委員会名簿」には、一之瀬輝義(委員長)、折江安光(副委員長)の他、大谷信之、五十嵐隆夫、山下寛、折戸久良、大谷敏夫、山森直清の6人の名前が列挙され、いずれの肩書も元あるいは前の議長あるいは副議長である。

以上のことから、昭和59年の秋の段階で「21世紀の大学づくり構想」を「21世紀の大学づくり—要約—」という資料によって説明をした側が「21世紀の大学づくり研究会」であり、説明を受けた側が「大山町議会学園都市特別委員会」であることがわかる。

富山国際大学の建学の教育的原点を示すものと言えるこの「1984.10.27」の日付が記されている「21世紀の大学づくり—要約—」という資料の「I はじめに」は、昭和40年代における“量の時代”が終焉し“質の時代”が始まったものの、時代も大学も混迷の渦中にあるのは、大学が「運用」や「創出」の「術の伝習の場」となり、本来の「認識の学」の府としての性格を希薄にしたことに起因しているのではないかという時代診断から始まっている。この時代診断に対する本来あるべき「大学を構築するにふさわしい場」は、「大自然の中で永い歳月にわたり生き続けてきた人々が、みずからの暮らしの意味を問い、集まって暮す知恵を育ててきた“むら”こそ、その場としてふさわしい」という処方箋が記されている。これが、この資料の1頁である。では、ここに登場する“むら”とは単に抽象的な観念的イメージなのであろうか、それとも具体的な人間が現実に生きた具体的な“むら”なのであろうか。また、この平仮名表記の“むら”は、通常の漢字表記の「村」とどのように異なるのであろうか。富山国際大学の建学の精神と基本理念を単に抽象的に唱えるのではなく、学生に具体的なイメージをもった理念として具体的に語り伝えるためには、このような問題から出発することが重要になる。

3.1. 「Ⅱ. 設立の趣旨」と「Ⅲ. 建学の精神」

以上のような時代の状況認識にもとづいて2頁の「Ⅱ. 設立の趣旨」には、以下のように記されている。

「Ⅱ. 設立の趣旨

1. 大学とは新しい価値の創造の場でなければならない。
2. 大自然の中で、永い歳月を生き続けてきた“むら”と新しい価値の創造を使命とする大学との、あらたなる出会いを大切に、共に生かし合う人間社会の原理を追求することを基本理念とする。
3. 旧来からあった価値が消え、あるいは見捨てられた廃村や過疎の地こそ、新しい価値の創造の場である大学の立地にふさわしい場所である。」(2頁)

ここで特に2.の「共に生かし合う人間社会の原理を追求することを基本理念とする」というところに、今日の大学の基本理念の「共存・共生の精神」の特に「共生の精神」の原型をみることが可能である。同時に“むら”と大学との「あらたなる出会いを大切に」することを大学「設立の趣旨」とする考え方から、「廃村や過疎の地こそ、新しい価値の創造の場である大学の立地にふさわしい」という帰結に至るのも、上述の時代状況認識からの論理的な一貫性を読み取ることができる¹⁵。

こうした論理の一貫性にもとづいて、「Ⅲ. 建学の精神」が導出される(3頁)。まず、「技術教育」ではなく「人間教育に徹した大学づくり」を進め、「認識の学」を、全ての教科の根底にすえる。次に、「地球規模で考え、地域に根ざして行動すべき時代にあつて、先進国・開発途上国を問わず、世界のいかなる国とも友好関係を結びうる人間を育てる」¹⁶。さらに、「人種、民族、宗教、思想、文化、習俗、性別、職業などの“違い”を認識し合い、対等に話し合える人間を育て、相互の違いを超えて協力し合う道を学ぶ」。以上が、大学の「建学の精神」である。

以上のように、「Ⅰ. はじめに」における時代診断的な状況認識と大学の本質(“認識の学”)の確認から、「Ⅱ. 設立の趣旨」における「共生の精神」の原型的確認をへて、「Ⅲ. 建学の精神」に至る叙述には熟考された緻密な論理的一貫性を確認することができる。

3.2. 「小さな大学、大きな理想」の「立地」

こうした建学の精神に基づいて、次の「Ⅳ. 大学の形態と構成」では地域住民との深いかかわりによって“開かれた大学”を目指し(5頁)、「建学の精神にふさわしい教師を招聘」(6頁)し、「全国数地域及び世界数地域に教室を設置」(7頁)し、「小さな大学、大きな理想」(4頁)が構想される。

こうした構想の中で、あらためて「新しい価値の創造の場にふさわしい大学」の「Ⅴ. 立地」について、「大自然の中で永い歳月生き続けてきた“むら”こそ」(8頁)ふさわしく、交通の要衝である「富山市に隣接」する立地条件の重要さが示される。

こうした立地条件を検討したうえで、「富山市に隣接しながらも、現在に至るまで、自然の生態系が色濃く保たれている大山町東黒牧をはじめ、文珠寺・小原などの台地は、この構想実現のために、最もふさわしい立地条件を備えている地であると考え」(8頁)と結論付けられている。ここで登場する「文珠寺・小原」については、「Ⅸ. その他一大学と地域との関係一」においても「旧集落単位のキャンパスづくりを基本にすえ、文珠寺、小原など、他の旧集落との統合的関連づけを考える」(11頁)と再び登場している。

先の冒頭の1頁に登場した“むら”とは単に抽象的な観念的イメージなのであろうか、それとも具体的な人間が現実に生きた具体的な“むら”なのであろうか、という問題が残っていた。また「新しい価値の創造の場である大学の立地にふさわしい場所」とされた「旧来からあった価値が消え、あるいは見捨てられた廃村や過疎の地」(2頁)という表現も、実は「文珠寺、小原」に重なる。

このように建学の精神に至る思考の論理をたどるとき、冒頭の「大自然の中で永い歳月にわたり生き続けてきた人々が、みずからの暮しの意味を問い、集まって暮す知恵を育ててきた“むら”」(1頁)→「旧来からあった価値が消え、あるいは見捨てられた廃村や過疎の地」(2頁)→「文珠寺・小原などの台地」(8頁)→「文珠寺、小原など、他の旧集落との統合的関連づけ」(11頁=最終頁)という文脈に、緊密で強靱な論理的一貫性を看取することができた。

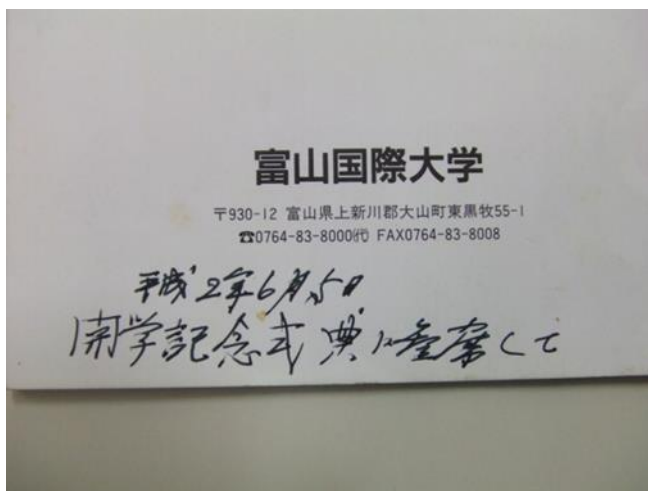
こうした個性的な独自の論理的一貫性をもつアカデミック・プランに導かれて、「VI. 施設及び設備計画」は、次のようなフィジカル・プランの基本設計を描く。

1. 分棟方式による校舎を原則とし、宿泊教授のための施設も設ける。
2. 既存の農地や林地と遺跡の間に点在する校舎の施設計画を基本にすえる。
3. “水”と“大木”を活かし、大学の中心に人々の集まりやすい“場”を設定する。」(9頁)

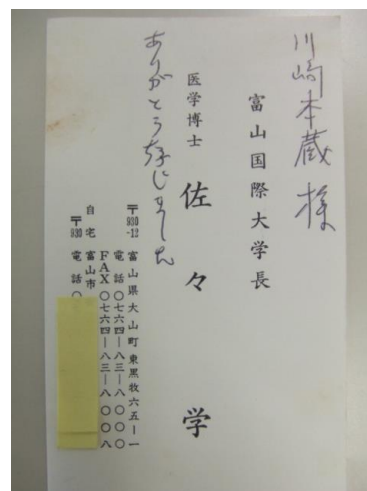
このように見ると、独自の論理的一貫性をもつアカデミックプランに導かれて、目に見える具体的な大学キャンパスの基本設計が作り上げられていることがわかる。

3.3. 大学誘致促進協議会副会長の川崎本蔵の大学開学記念資料と大学思想

ところで、この元本多研究室にあった「21世紀の大学づくり—要約—」というホチキス留めの資料と全く同じものが、東黒牧上野の川崎本蔵氏関係の文書資料に現存する。この川崎本蔵氏関係の文書資料によって本大学の創立史研究を補完することが出来る。この川崎本蔵氏の氏名は、東黒牧キャンパスの本部棟正面玄関脇にある大学創設記念碑にも刻まれていることから、大学創設に寄与した人であることが分かる。その川崎文書に残された「大学誘致促進協議会役員名簿(案)」によれば、その協議会の会長は「宮原義雄(東黒牧)」で、その副会長として「川崎本蔵(東黒牧上野)」と「新井行正(東福沢4区)」の名前が挙げられている。つまり大学誘致促進協議会の副会長として大学創設に大きな功績を残したことを通じて、大学創設記念碑「富山国際大学創設記念御芳名」にその氏名が刻印されていると思われる。



川崎本蔵「開学記念式典に陪席して」2016. 1. 15.

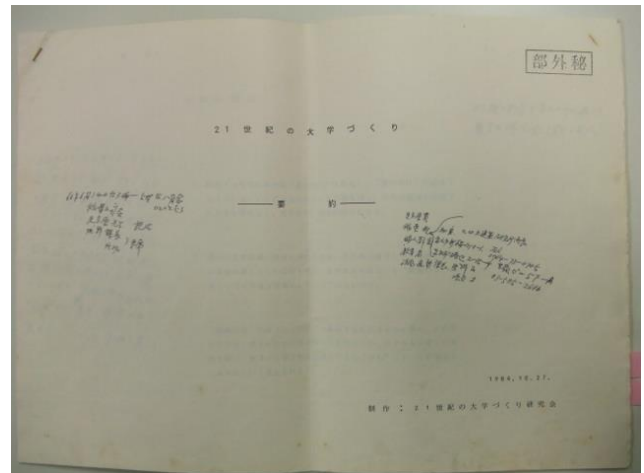
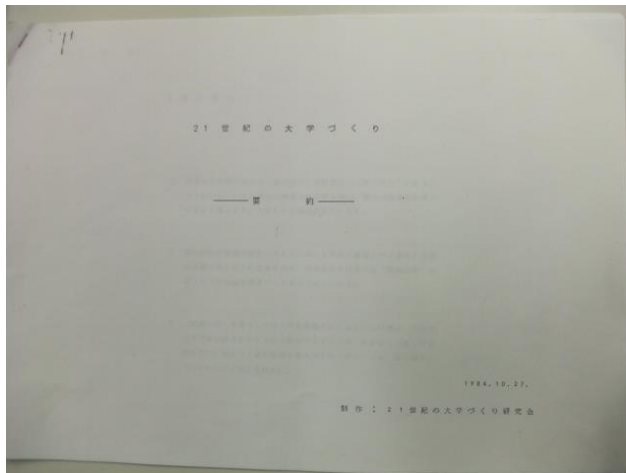


佐々学初代学長の名刺2016. 2. 22.

その川崎本蔵氏関係の資料には、『富山国際大学』の創立当時の大学パンフレットと『富山国際大学教員一覧 平成2年5月』との2冊があり、前者の裏表紙には「平成2年6月5日 開学記念式典に陪席して」という黒インクの(川崎氏によると思われる)手書きの記録が書き記されている。また後者には「川崎本蔵様 ありがとうございますと存じました」と(佐々学長によると思われる)黒インクで手書きされた「富山国際大学長 医学博士 佐々学」の名刺が差し挟まれている。このことから、平成2年6月5日に富山国際大学の開学記念式典が開催されて、そこに川崎本蔵氏がおそらくは来賓として招かれて「陪席」した際に、この2冊が川崎氏に手渡され、後者に上記の手書きの謝辞が記された学長の名刺が挟まれたということが推測される。同時に、これまで富山国際大学の開学記念日が6月5日になっている理由が不明ということが学内で何度となく言われて来たにも関わらずその理由が明らかとならなかったが、この資料によって平成2年6月5日に開学記念式典が開催されたということが明らかになったといえる。自校史研究にとって重要な情報といえる。

この東黒牧上野の川崎本蔵氏関係の文書資料に残された「21世紀の大学づくり—要約—」というホチキス留めの資料の印刷内容は、上記のように元本多研究室にあったものと全く同じものではあるが、異なる点はそこに川崎本蔵氏による黒インクの手書きのメモが書き込まれていることである。

このホチキス留めの資料の表紙左には、「60年6月14日午後3時—5時於八角舎 ひとびとむら 稲葉氏司会 足立原先生説明 浅野課長外2名来席」、また表紙右には「足立原貫 稲葉實」という氏名の他にその連絡先や住所などが詳細に黒インクで手書きされている。しかもこの一種の異本には「部外秘」という印が押されていて、この時点においてはまた部外秘扱いであった「21世紀の大学づくり」について、東黒牧在住の川崎本蔵氏に対して稲葉實氏司会のもとに足立原貫氏が約2時間に渡って詳細な説明を個人教授していることが分かる。このことから分かることは、当時においてはまだ「部外秘」扱いであった「大学づくり」構想を個人的に詳細に説明を受けるような立場に川崎氏があったということであり、また同時に設立地元のそのような立場の人物に対して「大学づくり」やアカデミックプランを「後3時—5時」の約2時間をかけて詳細に説明できる能力をもっていたのが足立原貫氏であるということである。



「21世紀の大学づくり—要約—」元本多研究室2014. 12. 1. 「21世紀の大学づくり—要約—」川崎本蔵資料2016. 2. 16.

この資料には上述のように川崎氏による様々なコメントやメモが黒インクで書き込まれている。たとえばこの資料の5頁のコメント欄には「すばらしい開かれた大学と思われる」と手書きされていることに、この資料にも

とづく足立原氏による「大学づくり」の説明に対して川崎氏が共感し高く肯定的に評価していることが示唆されている。この手書きの瞬間において、この地における「大学づくり」を地元が初めてその「建学の精神」において承認し、アカデミックプランのレベルで承認したのであり、この瞬間から「大学づくり」はこの地において具体的に動き始めることが可能となった。

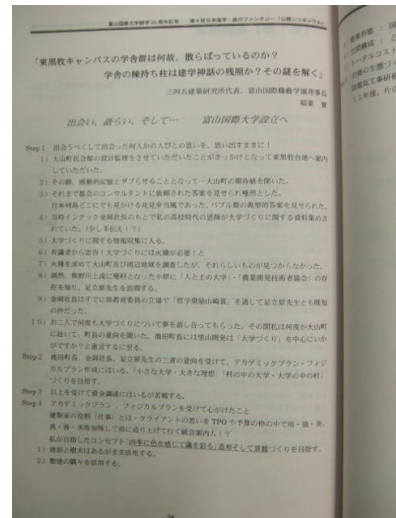
また上述した「3.旧来からあった価値が消え、あるいは見捨てられた廃村や過疎の地こそ、新しい価値の創造の場である大学の立地にふさわしい場所である」(2頁)という「II.設立の趣旨」の横には、川崎氏による手書きのメモで「『むら』は何故見捨てられて廃村となったか。山村は過疎化したか。これは営利社会の犠牲となったのである。豊かな生活のなり立ったむらは、音をたてて崩壊した。営利社会の見直しが肝要である。大学は人が豊かに生活出来る源泉とならねばならない。営利社会に替る次代社会を創造する原動力となるのが大学である」と書き込まれている¹⁷。このような大学思想が、まだ大学が出来る前の昭和60(1985)年の東黒牧に存在していたのである。もちろん当時も今も、東黒牧は「廃村」ではない。しかし建学の精神における「むら」という場合、このような「むら」への眼差しがあったのであり、それは異質なものを排除する前近代的な「村八分」の村とは異なって、「習俗言語が異なる世界の人々が、その違いをこえて出会える場であり、違うものが違ったままで共生できる場でもある「むら」をいう¹⁸。漢字表記の「村」ではなく、平仮名表記の「むら」には、このような含意をもった「次代社会を創造する原動力」としての大学が期待されていたのである。「営利社会」の「共存・共栄」の精神ないしは「ウィン・ウィン」の関係とは異なる理念である。

4. 「富山国際大学の聖地」と大学への「火種」

では、当時も今も東黒牧は「廃村」ではないとすれば、こうした原資料にたびたび登場する「廃村」とは具体的にどこなのであろうか。それは、このホチキス留めの資料に繰り返し登場する「文珠寺」や「小原」のうちの、後者の小原である。というのは文珠寺では、「草刈り十字軍」運動に重要な役割を果たした「農業開発技術者協会」の基幹的な事業地として今も牧場が営まれているからである。1964(昭和39)年東京オリンピック開催の年に最後の三戸が離村して「廃村」となったこの富山県旧大山町小原を「富山国際大学の聖地ですよ」と言われる人物がおられる。それが先ほどの「司会」として登場した稲葉實氏である。



開学20周年記念公開シンポジウム資料 2016. 1. 15.



同シンポジウム基調講演レジュメ 2016. 1. 15.

三四五建築研究所代表にして富山国際職藝学園理事長である稲葉實氏は、2010(平成22)年10月31日に東黒牧キャンパスで行われた富山国際大学開学20周年記念「公開シンポジウム 里山の環境に求めた建学の思い！～富山国際大学の「創設理念の精神」と環境・造形～」と題された公開シンポジウムで基調講演を行っておられる。この公開シンポジウムは富山国際大学と日本海学・森のファンタジー実行委員会の主催によるものであるが、「東黒牧キャンパスの学舎群は何故、散らばっているのか？学舎の棟持ち柱は建学神話の残照か？その謎を解く」と題された稲葉氏による基調講演のレジュメ(要旨)が残っている。ここに富山国際大学創設に至る経緯が簡潔にまとめられているので、以下に引用する。

- 「 出会い、語らい、そして… 富山国際大学設立へ
- Step1** 出会うべくして出会った何人かの人びとの思いを、思い出すままに！
- 1) 大山町民会館の設計監理をさせていただいたことがきっかけとなって東黒牧台地へ案内していただいた。
 - 2) その際、感動的記憶とダブらせることとなって…大山町の期待値を聞いた。
 - 3) それまで都会のコンサルタントに依頼された答案を見せられ啞然とした。
日本列島どこにでも見かける花見弁当風であった。バブル期の典型的答案を見せられた。
 - 4) 当時インテック金岡社長のもとで私の高校時代の恩師が大学づくりに関する資料集めされていた。(少し手伝え！?)
 - 5) 大学づくりに関する情報収集に入る。
 - 6) 有識者から忠告！大学づくりには火種が必要！と
 - 7) 火種を求めて大山町及び周辺地域を調査したが、それらしいものが見つからなかった。
 - 8) 偶然、熊野川上流に廃村となった小原に『人と土の大学』・『農業開発技術者協会』の存在を知り、足立原先生を訪問する。
 - 9) 金岡社長はすでに県教育委員の立場で『哲学奨励山崎賞』を通して足立原先生とも既知の仲だった。
 - 10) お二人で何度も大学づくりについて夢を話し合ってもらった。その間私は何度か大山町に赴いて、町長の意向を聞いた。池田町長には里山開発は『大学づくり』を中心にいかがですか？と進言するに至る。
- Step2** 池田町長、金岡社長、足立原先生の三者の意向を受けて、アカデミックプラン・フィジカルプラン作成にはいる。『小さな大学・大きな理想』『村の中の大学・大学の中の村』づくりを目指す。
- Step3** 以上を受けて資金調達にはいるが苦戦する。
- Step4** アカデミックプラン、フィジカルプランを受けて心がけたこと
建築家の役割(仕事)とは・クライアントの思いをTPOや予算の枠の中で用・強・美・真・善・美等加味して形に造り上げて行く統合案内人！?
- 1) 地形と樹木はあるがまま活用する。
 - 2) 敷地の隅々を活用する。
 - 3) 建築形態 : 国籍が明確で地域性も加味した中に国際性を持たせる。
 - 4) 空間構成 : どこにいても人の気配を感じさせる棟配置 平面計画。
 - 5) トータルコストの低廉化 : 極力メンテナンスフリーを目指す。
- Step5** 台地の生態づくりを目指す : 大学の将来の根づきを見越して、インテック研修所、北陸電気工事研修所、福沢保育園、小学校等 順次建設されていった。5年後、職藝学院、15年後、片山学園などが立地し、大山学園郷の骨格が定まる。」¹⁹

当日の実際の大学開学記念基調講演は、ほぼ正確にこのレジュメに沿って展開された。

富山国際大学の設立に至る経緯が記されたこの基調講演のレジュメからの引用箇所末尾に出てくる「小さな大学・大きな理想」は「1984.10.27.」の日付の「21世紀の大学づくり」に出てくる表現であり、また「村の中の大学・大学の中の村」のアイデアもこの「21世紀の大学づくり」の「むら」と新しい価値の創造を使命とする大学との、あらたなる出会いを大切に、共に生かし合う人間社会の原理を探求することを基本理念とする(2頁)という共生社会の原理探求という大学思想に表れているといえることができる。

以上の基調講演要旨(レジュメ)によれば、大学づくりに関する情報収集に入ったとき、有識者から「大学づくりには火種が必要!」と忠告を受けて、大学の「火種」を探したとき「熊野川上流に廃村となった小原に『人と土の大学』・『農業開発技術者協会』の存在」を知ったとある。レジュメに記されたその後の経緯を見ると、大学の「火種」を「熊野川上流に廃村となった小原」に「『人と土の大学』・『農業開発技術者協会』」として発見したということになる。つまり、「廃村となった小原」にある「『人と土の大学』・『農業開発技術者協会』」が富山国際大学の「大学づくり」への「火種」となったのである。こうした経緯ないし歴史が明らかとなるとき、稲葉氏が「小原は富山国際大学の聖地ですよ」という言い方をする事情が初めて理解できるようになる。つまり、もしも「熊野川上流に廃村となった小原」に「『人と土の大学』・『農業開発技術者協会』」がなかったならば、富山国際大学創設の「火種」もなかったかもしれないということであり、この「火種」がなかったならば富山国際大学は生まれなかったかもしれないのである。その鍵を握る人物が川崎本蔵氏なのだと考えられる。この「『人と土の大学』・『農業開発技術者協会』」を主宰していたのがレジュメに登場する「足立原先生」つまり足立原貫氏であり、だから稲葉氏は富山県立技術短期大学の研究室に「足立原先生を訪問する」のである。もちろん、「21世紀の大学づくり」の「火種」にするためである²⁰。だから、足立原貫氏を中心として「1984.10.27 制作: 21世紀の大学づくり研究会」による『21世紀の大学づくり—要約—』というホチキス留めの資料の説明に地元の東黒牧を訪れると、「60年6月14日午後3時—5時於八角舎 ひとびとむら 稲葉氏司会 足立原先生説明 浅野課長外2名来席」と東黒牧の八角舎の川崎本蔵はその資料に黒インクでメモを手書きで記入することになったのである。この資料の5頁のコメント欄に「すばらしい開かれた大学と思われる」と川崎本蔵が手書きで肯定的な感想メモを記したとき、東黒牧に大学設立が地元地域の人びとによって受け入れられる端緒が拓かれたと言っていると思われる²¹。

大学には建設資金が必要である。それが大学のフィジカルプランの金融面を支える。しかし大学もまた「パンのみに生きるにあらず」(マタイによる福音書4章4節)。新約聖書は神のロゴス(言葉)が必要と記した。有識者の忠告は、「大学づくりには火種が必要!」であった。東黒牧の川崎本蔵氏は小原の「『人と土の大学』・『農業開発技術者協会』」に共感し、さまざまな協力をする事となる。「『人と土の大学』・『農業開発技術者協会』」の小原での発足に決定的な役割を果たした農業開発技術者協会の中心メンバーは、実は東黒牧の川崎本蔵氏の下で牧場経営のノウハウを学び、そのあと小原と東黒牧を結ぶ道の途中にある文珠寺で乳牛の牧場を経営し、農業開発技術者協会はその搾乳からアデア牛乳の事業を展開することになる²²。ここまで「『人と土の大学』・『農業開発技術者協会』」の人的な信頼関係のネットワークの広がりが視野に入ってくる時初めて、『21世紀の大学づくり—要約—』という遡源的資料に東黒牧のほか文珠寺・小原の地名が繰り返して登場する理由が初めて理解される。ここでようやく、ひとつの答えが得られたことになる。つまり、冒頭の1頁に登場した“むら”とは単に抽象的な観念的イメージなのであろうか、それとも具体的な人間が現実に生きた具体的な“むら”なのであろうか、という問題への答えが得られたことになる。東黒牧から熊野川の源流を遡るような東黒牧～文珠寺～小原への遡行には、具体的にそこに生きた人々の大地に根差した営みがあり、そこから学び取られた「営利社会に

替る次代社会を創造する原動力となるのが大学である」という東黒牧先住者の大学思想があり、「習俗言語が異なる世界の人々が、その違いをこえて出会える場であり、違うものが違ったままで共生できる場でもある「むら」という普遍的な共存・共生社会を目指す「地球むら」という基本理念へと遡る哲学がある。「小原は富山国際大学の聖地ですよ」という言葉の意味、大学の「火種」という意味もまた、このような大学思想と理念への遡行とともに具体的に理解しうるようになる。

5. 「富山国際大学建学までの道程」と「建学の精神」

富山国際大学学長室に保管されている「富山国際大学建学までの道程」というファイルでは、上述の「21世紀の大学づくり」関係経過概要書(右上に1と手書き)、「21世紀の大学づくり研究会員名簿」(＃2)、「大山町議会学園都市特別委員会委員名簿」(＃3)に続いて、「富山国際大学に至る計画推進の過程」(＃4と手書き)があり、「I. アカデミックプランの構築」(＃4)から「III. マーケティングプランの構築」(＃6)がある。その「I. アカデミックプランの構築」(＃4)は、ほぼ上述の「21世紀の大学づくり—要約—」(1984.10.27)を2ページ程度にさらに凝縮した要約版といえるものである²³。その「D. 討議内容の要旨」は、以下の通りである。

「1. 設立の趣旨

- ①. 大学は「認識の学」の府であるべきである。
- ②. 大自然の中の「むら」こそ「認識の学」の大学にふさわしい。
- ③. 分棟方式により「むら」の中に大学の施設を散りばめ、大学に関わる人々とむらの人々との交流を図り、自然環境など共に生かしあう人間社会の原理を基本理念とする。

2. 建学の精神

- ①. 哲学と史学を全ての教科の根底にすえる。
- ②. 地球規模で考え、地域に根ざして行動すべき時代にあつて、世界のいかなる国とも友好関係を結びうる人間を育てる。
- ③. 世界の国々の「違ったもの」が「違ったまま」で共存できる原理を探求し、協力し合う道を学ぶ「場」の創造を目指す(＃4)

この「1. 設立の趣旨」および「2. 建学の精神」の③に「共生」と「共存」という大学の基本理念の原型を確認することができる。

この富山国際大学建学に至る経緯について2014年12月18日午後、大学設立に当初より携われてその経緯を詳細に知る稲葉氏を三四五建築研究所に訪ねてインタビューしてさまざまな詳しい事情をうかがうことができた。そこで得ることができた設立準備における建学の精神とアカデミックプランが生み出された当時の経緯は、次の通りである。

金岡幸二富山女子短期大学理事長のもとで青柳正美元県生涯学習センター長が大学設立のための資料集めをしておられた(したがって、上掲レジュメに記載されている「当時インテック金岡社長のもとで私の高校時代の恩師が大学づくりに関する資料集めされていた」という箇所の「私の高校時代の恩師」というのは青柳正美元センター長のことになる)。その手伝いをしているうちに、有識者何人かに相談したところ「火種があった方がいいよ」

という助言があり、その「火種」を探しているうちに「人と土の大学」に気づくと同時に、他方でこの大学を主宰する足立原先生のエオリア会を金岡理事長がバックアップしておられた²⁴。そうしたことがあって、「火種」が「哲学奨励山崎賞」に繋がっていく。またその背景に富山県の経済同友会が富山県から若者が県外に流出するのを止めるために富山県に高等教育機関を作らなければならないという提言をしていた。そうした中で、洗足学園魚津短期大学や高岡法科大学ができた。新しい大学の設立準備の部屋は大山町にできる前には、インテックの一角に金岡理事長や青柳元センター長がおられて、そのあと三四五建築研究所の2階にも1年以上あって会議などをしていったという時期もありました。その頃魚津、滑川、山田村からも大学の誘致合戦があったが、大山町に絞られていった。アカデミックプランを作る中心に東京大学の山崎正一先生、都市工学の川上秀光先生をはじめ、早稲田から内井昭三先生、尾島俊雄先生とか、錚々たるメンバーが来ておられた。アカデミックプランを作る段階での委員会というのは、後に法政大学の総長になられた清成忠男先生も入っておられた。結局、それは足立原先生の人脈でかなりの先生方が入っておられた。「地球規模で考え、地域に根差して行動すべき時代にあって、世界のいかなる国とも友好関係を結びうる人間を育てる」「世界の国々の『違ったもの』が『違ったまま』で共存できる原理を探求し、協力し合う道を学ぶ『場』の創造を目指す」という「富山国際大学建学までの道程」ファイルにある建学の精神、これは山崎正一先生と、それをしっかりサポートしておられた足立原先生によるものです。次に出てくる「小さな大学、大きな理想」というこのキャッチフレーズは足立原先生ですよ。

マーケティングプランは、くれいん館が中心になっていた。デザインポリシーの「“むら”の中の大学、“大学”の中のむら」は、足立原構想の中から私がサポートしたもの。

「地球むら」は、もとの原像は小原ではないかとインタビューが話題を向けると、もちろん原点はそこ小原なんだけれども、もう一つはオランダにワーヘニンゲンという大学があり、その大学はまさに分棟方式のむらの中の大学、大学の中のむら。そこのところは訳した時に、むらの中の大学は合っているのだけれども、大学の中の民家と訳した方が繋がりがいいと今では考えている。ワーヘニンゲンという大学については足立原先生に聞いてください。

「II.デザインポリシー」に登場する「自然との共生」(2頁)というのは、稲葉さんの建築哲学がある。東黒牧のキャンパスは、地形を活かしてブルドーザーを入れていない。当時みなさんはこんな分散しなくてみんな集めて一つにすればいいものとおっしゃったけれども、そうではないのだと、一つの集落を形成したかった。分棟の模型を作らせて、自然の地形に合うように配置していった。

この自然との共生というのをもう少し深めていきたいのですが、川崎本蔵さんに教えてもらったのは、東黒牧(の航空写真)の“むら”の中のこの道路の方向は何で決められましたかと聞いたら、それは風だという答えだった、それは「大変素晴らしいサジェスチョンをいただいた」。私もよくちゃんとそんなことを質問したもんだと思う。本蔵さんはそういうことをアドバイスしていただいた。普通どういうふうに道路を作るのって言うんだけど、も、「むら」の軸線はっていうときに、その風通しとか風を考えた。

小さな大学・大きな理想の中に国際交流で、著名な教師を世界中から招聘するときに1年とか何年とかは難しい。それは集中宿泊学習だと。近くに宿泊施設があつて1週間とか1箇月とかやろうじゃないか、というのが足立原先生の提案なんです。地域の協力で合宿所を作ってもらって、それを国際大学で活用するという計画だった。

以上が、稲葉實氏からインタビューによって取材することができた話の内容である。この調査研究から、『自己評価報告書・本編』1頁の「大学の基本理念」を支える「世界の国々との共存や自然との共生にふさわしい学びの空間として『地球むら』」という基本構想が生み出された経緯が明らかとなった。これが自校史の出発点をなすものであると同時に、「大学の基本理念」の具体的な理解を可能にするものとなる。

6. 教育と福祉のハイブリッドの基本哲学—マクルーハン理論との比較—

小原は、富山県富山市(旧大山町)の熊野川の上流の標高約六百メートル、五百年ほど前に開かれたと云われる合掌集落で、冬期は三メートルあまりの積雪がある厳しい自然の中で代々十九戸の戸数を守ってきたが、ついに昭和39年に「廃村」となった。この小原に1967(昭和42)年4月7日に足立原貫氏の農業開発技術者協会が再墾に入り²⁵、協会は昭和45年に山崎正一東京大学教授を小原に招いて3泊4日の講座として「人と土の大学」を開学する²⁶。「世界の国々の違ったものが違ったままで共存できる原理」を探求するという基本理念は、この小原において育まれた。そこで目指された実践的理念は、次のように記されている。—「近代日本がもともとのかかえている経済・社会構造のゆがみが重なって深刻化してきた分配の不公平そして『人間疎外』。新幹線が走り、カラーテレビがうつり、どんなに“便利さ”が満ち満ちてきたとはいえ、“高度な文明”とはこんなものではないはずだ。…(中略)能力の相違を優劣につなげず、それぞれの能力を尊重しあい、生かしあい、これを組み合わせて社会における不可欠な機能を果たしていく。人を生かし、自らもそれによって生かされるという二十一世紀への道、その道を探りあてることをめざして実践していく」²⁷—。能力の相違を生かしあって必要な社会的機能を実現していく実践哲学は、異なったものたちの間の共生社会によって福祉を可能にするような教育と福祉のハイブリッドの基本哲学を構想するとき、重要な示唆を与えることができる。合掌集落の廃村に至る五百年ほどの歴史の上に、このような実体よりも機能を重視する「文明批評の実践」の歴史が50年近く続いてきたのが熊野川上流の小原である—なお、この50年の間に小原の住民のいない合掌造が崩壊していったとき、その倒壊した合掌家屋の屋根から発見された建設記念の棟板には文政2(1819)年という年号が記されていたというから相応の星霜の歴史を有することになる²⁸—。「共存・共生の精神」は、これだけの歴史と内実と未来性と文明の構想力と実践哲学をもつものとして、稀有の基本理念といえることができる。

「地球むら」というのは、世に有名なマクルーハン理論の「地球村(global village)」つまり通信手段の発達によって世界が狭くなり一つの村のようになるというような枠組みと異なって、功利や営利とは異なる価値の転換に目を向けるという意味で遥かに実践的な構想力をもつと同時に、能力や個性の違ったものが違ったままで共存し、同時に必要な福祉を共生と教育によって可能にする共生哲学の試みという意味でも、さらに「自然との共生」あるいは「人と土」ないし人間と地球との根源的な関わりを重視するという点でも、遥かに視野の広い学際的なハイブリッド性をもっている。「地球むら」は、熊野川上流の小原で育まれた異なったものの共存をめざす実践哲学を「火種」としつつ、それを熊野川中流の東黒牧で構想するときにはオランダ実学主義を代表するワーヘニンゲン大学の「各学部の建物がまち全体に点在」するというキャンパスの形を参照して²⁹、「むら」の中の大学、“大学”の中のむら」の分棟方式を構想したという意味でも、ヨーロッパ実学の先端的な農学・林学を参考にしたものであった。なお、オランダのワーヘニンゲン大学の農学・森林学部門は、2014年度の学部別QS世界大学ランキングにおいてヨーロッパ首位、世界2位に位置付けられている³⁰。「共存・共生の精神」とは熊野川流域の厳しい豪雪地帯の合掌集落の500年以上の歴史に文化的社会的に根ざすだけでなく、農学・森林学ならびに環境科学部門においても先端的なヨーロッパの大学のキャンパスにフィジカルポリシーとデザインポリシーを学びつつ、地域的特性と世界的普遍性と未来に先駆ける構想力をもったアカデミックポリシーの教養形成に根ざすものとして、比類のないものといえることができるだろう。

7. おわりに—「共存・共生」の風の“むら”と「知性・教養・個性」の次元—

東黒牧キャンパスの机の向きが校舎の向きと共に、なぜ東西に走る緯線からも南北に走る経線(子午線)からもずれているのか、その原因が今回の調査研究によって明らかとなった。この原因が明らかになったのもまた、創立記念日が6月5日であることの原因が平成2年6月5日に富山国際大学の創立記念式典が開催されたことをその手書きのメモによって現代に伝えてくれた川崎本蔵氏の「サジェスチョン」によるものであった。「自然との共生」というフィジカル・プランに基づくデザインプランを理解する際に、それは東黒牧の“むら”の道路の方向が「風」で決まったという川崎本蔵氏の「大変素晴らしいサジェスチョン」に依るものであった。つまり、大学のキャンパスができる前にあったその土地の風に根づいた“むら”の「軸線」を尊重してそれに従った結果であったのである。「違ったものが違ったままで共存する」「共存・共生の精神」にもとづく「21世紀の大学づくり」が点在する分棟方式—それはオランダの世界先端のワーヘニンゲン大学を参照枠とするものでもあった—は、このような意味で「自然との共生」というフィジカルプランを体現するものであった。「風はどこから吹いてくる」(堀田善衛「伏木中学校の歌」)。東黒牧の台地では、南東から北西に向かって強い風が吹く日が多い。したがって、東黒牧の新しい21世紀大学の“むら”を設計するとき、その風に沿うように作られていた東黒牧の集落の中の道路の方向に沿うように、大学の校舎の向きも設計された。校舎全体の向きが南東から北西に向いてデザインされたから、教室もその中の机も風の方向に沿って並ぶことになったのである。富山国際大学の呉羽キャンパスの校舎が概ね子午線を軸として配置され、その結果としてその教室も机も経線(子午線)・緯線という極めて幾何学的な都合によって決定された人工的座標軸に従って並んでいるのと異なって³¹、東黒牧キャンパスはその土地を吹く自然の風の方向を21世紀の「地球むら」の「“むら”の中の大学、大学の中の“むら”」の軸線としたということが明らかとなった。

しかし川崎本蔵氏からの稲葉實氏への「素晴らしいサジェスチョン」は、そこまでであった。では、なぜその里山の“むら”の道路の方向は風で決められなければならなかったのだろうか。そこにはどのような必然性があったのだろうか。それは、そこに機械ではなく自らの身体性に拠って開墾もしくは再墾に取り組んで作業道路を切り拓いた人間にしか分からない身体的必然性があった。

私はかつて授業の空き時間に東黒牧台地の長年見捨てられた耕作放棄地に「再墾」的な草刈りに入っていた。それは近隣住民が荒れた耕作放棄地に困っているという話を聞いたためであると同時に、身体性の哲学の実践的実験研究でもあった。したがって後者の身体性の実践哲学の研究のため、刈り払い機を使わずに大鎌による全身的な手刈りの身体的重労働であった。機械を使った作業に比べて極めて効率性は悪く、身体的労力は桁違いに大きくなる。作業上の助言もなく、一人でやみくもな方向で重労働の草刈りに取りかかる。作業開始後数日の経験を経る中で、背丈を超える大きな雑草群が一定の方向になぎ倒されているのに対してそれに逆らわない方向で手刈りをすると、疲労が半減以下になることが身体的に分かってくる。つまり、大きな雑草群は南東の強風に連日吹きつけられて南東から北西の方向になぎ倒されており、これを闇雲な方向で「再墾」するのではなく、風上から風下に向かって草が倒されている方向に従って、その倒されている根元を大鎌で手刈りすると体力を温存できて作業の持続可能性(sustainability)が生じることに自然と気づく。このことは、小鎌による園芸的な半身的な草刈りによっては気づきえないことと思われる。それは身体的知性の全身的な身体的教養と言っていい。それは身体的実践哲学の研究がもたらした個性的風土に即した個性的知性の予想外の研究成果と言ってもよかった。しかし、この身体的教養知性は、古くから東黒牧の台地で全身体によって開墾に取り組んで来た地域の人々であれば共通の知性であったと思われる。というのは、汗まみれになって草刈りをして数日経過してようやく上記の身体的知性を獲得した頃、近隣住民の腰が曲がった90歳前後と思われる老女が通りかかって「草刈り機は使いなさら

んのけ。そんならこっちからこう刈った方がいいよ」と助言してくれたからである。それはまさに風上から風下に向かって刈りなさいというサジェスションであった。しかし、当初からそのノウハウを(実体として)与えられていたならば、なぜそうであるのかを身体的機能において経験的に(一種の暗黙知として)獲得することはできなかったであろう。「知性・教養・個性」の「暗黙知の次元」(マイケル・ポランニー)とは、こうした身体的教養の次元をいう。

その老女は、川崎本蔵氏の亡き未亡人の友人でもあったことが後にわかる。川崎本蔵氏が東黒牧台地に入植したのは、昭和33年であった³²。草刈りの歴史を調べると、ちょうどその頃に刈り払い機が開発されて全国に普及し始めた時期であり、川崎氏らが入植した当初はしばらく手刈りの全身体的作業が続いたと思われる。その体験があった入植当初の世代は、台地の風向きと開墾作業との相関関係を身体的教養として「暗黙知の次元」で獲得していったのである。この身体的「暗黙知」は、刈り払い機による機械刈りによっては気づきえない次元である。というのも後年、同じ場所に強力な刈り払い機で機械刈りに入ったときは、風向きと関係なく機械刈りをしていても疲労度にほとんど差がなくなったからである。機械化とともに人間は自然的身体性を喪失するのである。しかし、機械は自然性を喪失しても困らないが、人間が身体性を喪失することは人間の自然性に反する。本稿冒頭の「1. はじめに—南原繁の身体的教養と地域的特性—」において既に、ゲーテ『ファウスト』に予言された19世紀ドイツ教養市民層のように「身体」を「貶下」するような「教養」のあり方を批判して、南原繁は「しかし、われわれの精神を歴史的具體性において捉えるときに、身体は人間の生にとって重要な意義を有するに至るであろう」と講述していたことに注目していた。南原哲学における教養概念の重要な視点であるが、この視点を逸する限り、19世紀ドイツ教養市民層の限界を超えることは難しい。その歴史的教訓に取り組んで日本独自の教養史に即した代案を提起していたところに³³、他の哲学にない南原哲学の重要性がある。日本の教育基本法の教育哲学もまた、この観点から理解することが試みられなければならない。また今日、教養教育に関する議論が混乱をみているとき、富山女子短期大学の発起人であった吉田実知事が「七・三制教育」の論議の「混乱」に関して記したように、「南原郡長の教育理想をいま一度かみしめてみるべきではなかろうか」³⁴。

稲葉實氏は東黒牧に大学を作るときにもブルドーザーは入れなかったと言う。川崎本蔵氏らが東黒牧台地に入植したとき、風上から風下に向かって開墾し作業しなければならない「自然との共生」の身体的必然性があったのである。となると、書齋の哲学ではなく現場の作業(「行動哲学」)ではどうなるか。作業運搬用の道路は風向きと平行に作って、そこから直角に作業用の細密路網を開設して、その作業用細密路網から直角に風上から風下に向かって作業を進めるのが合理的(哲学)になる。この身体的自然的(つまりフュシス的)合理性は、「自然との共生」という以上に自然への内属に近い。このような風に做った道路の軸線と細密路網の設置の仕方は、現在も特に東黒牧上野の農地において観察できる。その暗黙知が示唆するのは、人間が自然と対立することの愚かさであり、人間もまた自然の一部という(二十一世紀の)暗黙知の次元である。

自然と対立した西洋のファウスト的文明とファウスト的教養のあり方を批判した昭和20年の南原繁は³⁵、身体性を軽蔑しない「知性・教養・個性」のあり方を提起して、「教養の核心は、知性をもってする人間本質の展開または人間個性の開発にある」として、射水の自然的風土に即した人間形成の教養のかたち(形相)を射水の乾田化事業に具現化すると同時に、岩波文庫に歌集『形相』を残した。射水における身体的教養とはこうしたものであったが、こうした個性的風土に根差した身体的教養の哲学は、東黒牧において「共存・共生の精神」というアカデミックプランをフィジカル(つまりフュシス的—もちろん古典ギリシア文化の「フュシス」がラテン語経由で現代英単語のフィジカル **physical** の古典的語源である—)に結晶化したのである。そこにはアカデミックプランとフィジカルプランとの稀有のインクルージョンが結実しているのであり³⁶、「能力の相違を優劣につなげず、それぞれの能力を尊重しあい、生かしあい、これを組み合わせて社会における不可欠な機能を果たしていく。人

を生かし、自らもそれによって生かされるという二十一世紀への道」を探求する「二十一世紀の大学づくり」における(教育と福祉のハイブリッドの)基本哲学への「素晴らしいサジェスション」を、ここに見出すことができる。

(註)

1 南原繁「学徒の使命 その一」『南原繁著作集』第6巻、岩波書店、1972年、41頁。

2 前掲同書、43頁。

3 拙稿「「トネリコの里」からの「知性・教養・個性」と南原繁の教育哲学—自校史・郷土教育と子ども育成学構築の基礎的研究—」、富山国際大学『子ども育成学部紀要』vol.6、2015年、33頁。

4 「日本に唯一の『農業公民学校』」という表記・表現を、南原繁は少なくとも二度使っているため、この表記・表現に南原繁は誇りもしくは執着をもっていたことがうかがわれる。南原繁「郡こいた頃の回想 その一」『南原繁著作集』第8巻、岩波書店、1973年、273頁。丸山真男・福田歓一編『聞き書 南原繁回顧録』、東京大学出版会、1989年、63頁。

これに優る誇りもしくは執着を南原繁が示すのは、内村鑑三、新渡戸稲造、フィヒテ、カント、実母くらいと思われるが、これらはいずれも南原繁という人物を形成した側のものであり、南原本人が生み出した所産ではない。南原繁本人による功績あるいは所産に関わるものとして南原本人が誇りと執着を示すものは他に教育基本法と射水平野の乾田化事業くらいであるが、「日本に唯一の」という表現を複数回繰り返す表現は稀である。もちろんその哲学書『国家と宗教』および歌集『形相』が南原の作品・業績としてあるが、南原本人が上記のような誇りや執着を示す表現はあまりない。

5 学校法人富山国際学園創立50周年記念事業実施委員会記念誌部会編『富山国際学園50年史』、富山国際学園、2014年、33頁。

詳細は前掲拙稿、31頁。さらに、その脚注(44)で取り上げた吉田実「開学のころの思い出」『十年を顧みる』(富山女子短期大学編、1973年)、参照。

6 富山国際大学『平成22年度 大学機関別認証評価 自己評価報告書・本編(財団法人 日本高等教育評価機構)』(平成22(2010)年6月)、1頁。

7 同上、2頁。

8 同上、2頁。

9 2013年10月10日付朝日新聞「中国、ASEAN困い込み オバマ氏居ぬ間に着々 『選択肢、TPPだけじゃない』」、朝刊10面。

10 2015年9月26日付朝日新聞「サイバー問題 米中合意 首脳会談」、夕刊1頁。

11 2016年2月7日付読売新聞「政治の現場4 中東不安 露に『種まき』」、朝刊4面。

12 この場合、「共存・共栄」の論理においては、文脈によっては人権問題も相対主義的に捨てるべき小異となり、「営利」という大同に就くべきべきだと相手に迫る場合もあることになる。たとえば2015年12月のアジアインフラ投資銀行(Asian Infrastructure Investment Bank、AIIB)の発足の場合において「共存・共栄」を迫られた欧州各国等は、確かに小異を捨てて大同に就いて「共存・共栄」の道を選択したわけである。

違ったものの共存と「共存・共栄」との思想的相違については、次が示唆的である。足立原貫『道標はない—“農”の論理で探る“やる者”の道—』、ぎょうせい、1987年、60頁。また「共存・共栄」のための「キメの細かい指導」については、同63頁、参照。

なお、本節において「ウィンウィン」と「ウィン・ウィン」などの表記があるが、それは厳密に脚注で示した新聞各紙の表記のヴァリエーションによるもので、本質的な差異はないものとして表記を統一しないで諸表記をそのまま尊重することとした。

13 このファイル「富山国際大学までの道程」とほぼ同様の内容のファイルが、本学学長室に現存している。したがって、本多研究室所蔵のファイル「富山国際大学までの道程」に記載されていることは、学長室所蔵のファイル「富山国際大学までの道程」によって確認することができる。学長室所蔵のファイル「富山国際大学までの道程」には「浦山先生

より」というメモが付されていたので、本多研究室所蔵のファイル「富山国際大学までの道程」をもとに、それと同様の内容のファイルが作成されて学長室に所蔵されている、もしくはその逆の経過による複本ないしは異本ではないか、と推測される。

14 ファイルの「21世紀の大学づくり研究会員名簿」では「青柳正義(インテック参与、元県生涯学習センター所長)」と表記されているが、今回の調査においてこの青柳正義という氏名表記は「青柳正美」の誤記であることが判明したので、本文では訂正して表記した。この青柳正美氏はかつて富山高等学校の陸上部の顧問をしておられ、稲葉實氏の高等学校時代からの恩師とのことで、当時においてインテックの参与であるとともに富山女子短期大学の金岡幸二理事長のもとで大学設立準備に携わっておられたとのことであった。今回の氏名の誤記訂正は、この稲葉實氏のご教示に基づいて行った。

なお、2014年12月18日に三四五建築研究所において稲葉實氏から聴取したインタビューによると、その頃魚津、滑川、山田村からも大学の誘致合戦があったのを、大山町がいち早く受け入れ態勢を作ってくれたとのことであった。

15 なお、「新しい価値の創造の場」という言葉については、かつて大学紛争の時代に富山県立大谷技術短期大学の体育館で「大学の目的は何か？」と問うた学生がいたという。当時において足立原氏と共に学生委員会に属していた神子高氏という英語の教員が即座に「大学とは新しい価値創造の場である」と答えたことに足立原氏は懐かしさを感じ、それから両教員は意気投合したという。「新しい価値の創造の場」という表現に関わる前史とも言えるエピソードとして記録する。

16 同時に、本稿2節で引用した富山国際大学『平成22年度 大学機関別認証評価 自己評価報告書・本編(財団法人 日本高等教育評価機構)』(平成22(2010)年6月)の冒頭「I. 建学の精神・大学の基本理念、使命・目的、大学の個性・特色等」の「1. 学園の建学の精神」で「高い知性と広い教養、健全にして豊かな個性」を富山国際学園の建学の精神として確認した後に登場する、「2. 大学の基本理念、使命・目的、教育理念・目標」の冒頭における「富山国際大学の設立準備過程において、『地球規模で考え、地域に根ざして行動すべき時代にあつて、世界のいかなる人々とも友好関係を結びうる人間を育てる』ことが必要であるとして」という記述の原型を、この「1984.10.27」の日付が記されている「21世紀の大学づくり—要約—」という資料の「III. 建学の精神」におけるこの記述に遡源的に発見することができる。このことは同時に、今日の富山国際大学の「2. 大学の基本理念、使命・目的、教育理念・目標」に与える本資料の決定的重要性とともに信憑性を裏付ける。

17 思い起こせば、2011年の東日本大震災およびそれに続く福島県原発災害を目の当たりにした当時の日本国民の多くが仮に一時的であったとしても共有したと思われる思いを想起すれば、「豊かな生活のなり立ったむらは、音をたてて崩壊した。営利社会の見直しが肝要である」という川崎メモは独創的であるとともにその時代の普遍性をも共有しているようにも思われる。

18 富山国際大学『平成22年度 大学機関別認証評価 自己評価報告書・本編(財団法人 日本高等教育評価機構)』平成22(2010)年6月、2頁

19 稲葉實「東黒牧キャンパスの学舎群は何故、散らばっているのか?学舎の棟持ち柱は建学神話の残照か?その謎を解く」富山国際大学開学20周年記念『公開シンポジウム 里山の環境に求めた建学の思い!~富山国際大学の創設理念の精神と環境・造形~』基調講演レジュメ、富山国際大学、平成22年10月、28頁。

20 ちょうどその頃、その研究室で足立原貴氏は射水地域研究会の代表者として「乾田化および新港建設がもたらした富山県射水地域の変容に関する研究」の取りまとめをしていた。稲葉氏が足立原氏を訪問した当時、この共同研究の助手をしていた人物もその研究室にいたが、この共同研究が終了した後この機縁でこの助手は稲葉氏の三四五建築研究所に就職することになるが、実はこの助手もまた農業開発技術者協会に深く関わる人物であったのである。この人物は、後年2014年7月26日に東黒牧・川崎本蔵の森において「森の音楽会 序章 プロローグ 森で奏でるハーモニー 2014.summer」という音楽会をコーディネートしている。また、この射水地域研究会の共同研究者には、日本における都市工学の第一人者であった川上秀光(東京大学教授)もいた。この射水地域研究会の共同研究のつながりから、この川上教授もまた富山国際大学の設立準備に関わっていくことになる。射水地域研究会『乾田化および新港建設がもたらした富山県射水地域の変容に関する研究』トヨタ財団助成研究報告書、1985年、参照。

21 今回の調査研究によって既に明らかになったように、「1984.10.27」の日付が付された「21世紀の大学づくり—要約—」という資料をもとに「21世紀の大学づくり研究会」が大山町もしくは「大山町議会学園都市特別委員会」に説明したのが1984(昭和59)年秋であった。しかし「60年6月14日午後3時—5時於八角舎 ひとびとむら 稲葉氏司会 足立原先生説明 浅野課長外2名来席」と川崎本蔵邸の八角舎において同一資料によって説明が行われるまで半年以上

の約8ヶ月の歳月が経過していることが注目される。そこには大山町「役場庶務課長」が同席していたこともクレジットされていた。そもそも前史として最初はフィジカルには、もしくは土地利用に関して大山町が能動的に動いている記録があった。他方で、「新大学設置の要請を受けた金岡幸二理事長は、昭和59年6月に『21世紀の大学づくり研究会』を発足させ、『富山国際大学アカデミックプラン』を作成。先の答申が出された昭和61年の暮れから、カリキュラムと教員人事に関する検討が進められた。昭和62年9月には、本多宗高氏を室長とする『新大学設立準備室』が、旧大山町役場内に設置され、12月には『新大学設立準備委員会』が設置され、認可申請への準備が本格化した」（前掲『富山国際学園50年史』、59頁）。いわば今回の調査研究は、この昭和59年6月から「先の答申が出された昭和61年の暮れ」の間にある空白の初期の経緯を明らかにすることになった。それによると1984(昭和59)年6月に「21世紀大学づくり研究会」が発足してから同年秋に同研究会が大山町側に対して「1984.10.27」の日付が付された「21世紀の大学づくり一要約一」という資料をもとに説明するまでは順調な進捗と言っている。ところが「60年6月14日午後3時—5時於八角舎」で川崎本蔵氏に対する説明する際の資料がその約8ヶ月前に大山町に対して説明した資料と同一であるということは、内容的に進捗がないに等しい。これは大山町がその内容に難色を示してその内容的な改訂に時間がかかったということを示唆しない。そうだとしたら内容的に大幅な改訂がなされたはずだからであるが、その痕跡はない。全く同一の資料で8ヶ月後に説明がなされているからである。ということは町行政ではなく地元住民の理解と了承を得るのが難航したからとも考えられる。いずれにせよ、大山町の庶務課長が同席して稲葉氏の司会のもとに足立原氏が川崎氏に「部外秘」の資料を渡して説明する必要があったことは間違いない。そして、川崎氏は渡されたその「部外秘」の資料の5頁のコメント欄に「すばらしい開かれた大学と思われる」と手書きで記入したのであり、そして「大学づくり」が進んだという事実が確認できる。

『勸進帳』で義経一行が越中「如意の渡し」に由来する加賀「安宅の関」を通れるかどうかという鍵を握った関守の富樫左衛門に比定される位置に、仮に東黒牧在住の川崎本蔵氏がいたとすれば、弁慶に比定されるのが足立原貫氏であり、源義経一行は富山国際大学の大学づくりに比定される。とすれば、平成2年6月5日の開学記念式典に招かれた川崎本蔵氏に対して、佐々学初代学長が「ありがとう存じました」というメッセージを名刺に書き入れて贈るというのも充分納得がいくところであろう。『勸進帳』（いわば南都東大寺のフィジカルプラン）において重要なのは（極論を言えば）勸進帳の中身ではない。そうではなくて『勸進帳』一行の関所の通過をめぐる人間群像と人間ドラマであり、そこでどのような人間の「理念」が形成されたかということである。そしてその優れた芸術劇を観ることによってその「理念」を獲得することが「教養」の形成でもあり、人間形成ともなる。そこで鍵を握ったのは、人間である。「富山県教育哲学・思想」の根底にあるはずの鍵もまた、同じであろう。このような意味において、真に優れたフィジカルプランはアカデミックプランとインクルージョンしなければならない。しかしこのような意味において、真に優れたフィジカルプランは世に稀有である。しかし本研究による限り、富山国際大学の建学の精神をめぐるアカデミックプランとフィジカルプランは「共存・共生の精神」において実は「違ったままで」インクルージョンしており、そのような稀有の事例を示唆している。21世紀のダイバーシティ時代における教育と福祉を構想する理念を示唆している。

²² 農業開発技術者協会編『土に根ざした20年』桂書房、1990年、11、24、51頁。

²³ ファイル「富山国際大学建学までの道程」では、通し番号Ⅱが不明で抜けていたり、この資料がどのような時・所のものなのか等が不明であり、関係者のご教示を要する。

²⁴ なおこのエオリア会は、足立原貫氏が大学生であったときに山崎正一東京大学教授に顧問を委嘱して以来のギリシア文化研究会である。このエオリア会には文部事務次官(昭和63年6月10日～平成2年7月1日)の阿部充夫氏も以前から入っていたという。

エオリアとは、イオニア人、ドーリア人と並び古代ギリシアを構成したアイオリス人(Aioleis)に由来し、アイオリス人の祖がギリシア神話に登場する風の神アイオロスに由来したともされる。ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』でもアネモイ(風の神)に関わるとともにゼウスの好意で風を支配する力を得たとされる。英和辞典で“*Aeolian*,”を調べると、アイオロスの、風の、風に運ばれた、風の音のような、ため息をつくような、という形容詞としての語意のほか、アイオリス人(ギリシア人の一種族)という名詞の語意も記されている(研究社『リーダーズ英和辞典』2nd ed.)。イタリア南部のエオリエ諸島(Aeolian, Eo-)は風の神アイオロスが住む島とギリシア人は信じたとされている。“*Oxford Dictionary of English*”(2nd ed.)の“*aeolian, (US eolian)*”の項では、“▶ adjective <chiefly Geology> relating to or arising from the action of the wind”として砂漠の砂丘や黄土など地質学的な風成の地層・地質・地形に関わり、風が形成した地理的形質に関連することが分かる。さらに、「エオリアンハープ(Aeolian harp)」は風が吹くと鳴る「風鳴琴(wind harp)」とも訳され、風が吹くと弦が振動して風の強弱によって変化するハーモニーの多様な音色が1800

年頃に欧州で評判になった。こうした音楽的文脈から、昭和初期の東京において「エオリア音楽院」という音楽教室名もありえたことが理解される。

風が一方で地形的風景を生み出すとともに、他方で音楽をも生み出すのは、東黒牧台地でも同様であり、後年 2014 年 7 月 26 日に東黒牧・川崎本蔵の森において「森の音楽会 序章 プロローグ 森で奏でるハーモニー 2014.summer」という小さな音楽会が開かれた際には、期せずして風が生み出す音のフルートと弦が奏でる音のバイオリンによる二重奏が披露された。また、東黒牧台地において風がどのような風景を身体的教養として生み出すのかは本稿最終節に詳述した。

25 足立原貫『一つの社会の死から』北日本新聞社、1975 年、15 頁。

26 足立原貫・野口伸『きみ青春の一夏 山へ入って草を刈ろうー「草刈り十字軍」運動の発端と展開』三洋インターネット出版、1997 年、11 頁。

27 足立原貫『一つの社会の死から』、14 頁。

28 この棟板は小原の北野家の合掌家屋のものと伝えられ、その合掌家屋の写真は、足立原貫『一つの社会の死から』、巻頭グラビア 2 頁上に掲載されている。

29 井形雅代「【国際社会とともに】オランダの実学主義を学ぶー姉妹校ワーヘニンゲン大学に留学ー」東京農業大学『新実学ジャーナル』「食料・環境・健康・資源エネルギー&情報」2006 年 3 月号。

<http://www.nodai.ac.jp/journal/research/igata/0603.html>

30 オランダ大使館・総領事館「オランダのワーヘニンゲン大学の農学・森林学部門と環境科学部門が、世界上位にランキング」「ニュース News article | March 20, 2014」。 <http://japan-jp.nlembassy.org/news/2014/03/オランダのワーヘニンゲン大学の農学・森林学部門と環境科学部門が、世界上位にランキング.html>

31 なお、東西南北の経緯度線のほかに呉羽キャンパスの校舎の向きを規定したものとして考えられるものとしては、南原繁射水郡長以来取り組まれてきた新堀川の氾濫防止のために、(熊野川が流れ込む神通川下流の場合と同様に)新堀川の自然の蛇行を直線化して掘りなおされた現在の新堀川承水路の幾何学的直線的流路を「軸線」としてその周辺地域のランドデザインを整備したという可能性も考えられる。これはこれで、射水には射水の「射水」による、つまり「風」ではなく「水」による歴史的・人間的に形成された自然(フュシス)的身体性あるいは風土性の教養形成があったという点で、東黒牧台地と共通する<フィジカルプランの生成と構造>があったことになる。この場合は、射水平野の「軸線」を規定したのは「水」であり、東黒牧台地の「軸線」を規定したのは「風」であることになる。この場合、呉羽キャンパスは<水のキャンパス>、東黒牧は<風のキャンパス>と形容することができる。水のフィジカルプランを導くアカデミックプランが「知性・教養・個性」であり、風のフィジカルプランに対応するアカデミックプランが「共存・共生」の風(精神)である。なお、「水」と「風」は古来の四元ないし四大のうちの二大であるとすれば、残る「地」をなすが学生なら、教員は「火」に、火のイグニッションになればよい、という四大のランドデザインが見えてくる。

32 川崎本蔵氏関係資料の「昭和 57~60・9 川崎本蔵」と表紙に記された資料による。

33 この日本独自の教養史に即した身体的教養という代案に注目しなければ、南原繁の教養形成の独自の労苦を見失うことになる。この南原独自の身体的教養概念を見失うとき、一方において東京大学教養学部の教養概念の方向性の動揺(丸山真男・福田歓一編『聞き書 南原繁回顧録』東京大学出版会、1989 年、368 頁、375 頁、377 頁、387 頁、397 頁等、参照)につながり、他方において富山県における「七・三教育」の迷走(『矢口新選集』別巻『地域教育計画とその展開ー富山県における実践ー』能力開発工学センター、1993 年、61 頁。吉田実「射水郡長・南原繁」丸山真男・福田歓一編『回想の南原繁』岩波書店、1975 年、569 頁、丸山真男・福田歓一編『聞き書 南原繁回顧録』、382 頁、参照)につながるようになる。このようなパースペクティブも一方において教育基本法と東京大学の教養学部を定礎した南原繁の教養哲学、他方において「富山県教育哲学・思想」の土台を定礎した一人である南原繁の教育哲学を一体的な体系性において俯瞰する場合にのみ可能になるパースペクティブである。

またこの日本独自の教養史に即した身体的教養という 19 世紀「ドイツ教養市民層」の教養概念に対する代案を創出した南原繁の哲学的労苦も、その哲学的営為の参照枠として南原繁が敬愛してやまなかつた内村鑑三の無教会主義という(西洋キリスト教に対する日本独自の教養史に即した)日本独自のキリスト教の開拓という先行例との師弟的關係からも理解される。

34 吉田実「射水郡長・南原繁」、丸山真男・福田歓一編『回想の南原繁』岩波書店、1975 年、569 頁。

35 自然と対立したファウスト的文明に関連して、産業教育、新産業都市、地方創生に関連して、足立原貫『道標はな

いー“農”の論理で探る“やる者”の道―』、ぎょうせい、1987年、71頁以降、参照。

³⁶ 今日では google 等によって他大学のフィジカルプラン等の情報をインターネット経由で容易に検索することができる。そうした他大学のフィジカルプランを調べるとき、今回の研究によって確認されたような地域の長い歴史の中の人々の営みに根付きつつ、時間的にも(500年前～文政2年～1964年～1967年～1985年～1990年)空間的にも(小原 - 東黒牧 - 射水 - オランダ)多様な文化の共存という多様性(ダイバーシティ)の中でヨーロッパの環境科学部門で最先端のワーヘニンゲン大学のフィジカルプランも参照しつつ、アカデミックプランとフィジカルプランとの論理的にも内的にも歴史的にも緊密な相互のインクルージョンを実現している例は稀有と言ってよい。

※ 本稿は、平成27年度富山国際大学学長裁量経費研究助成第1号戦略的教育研究による研究成果の一部である。